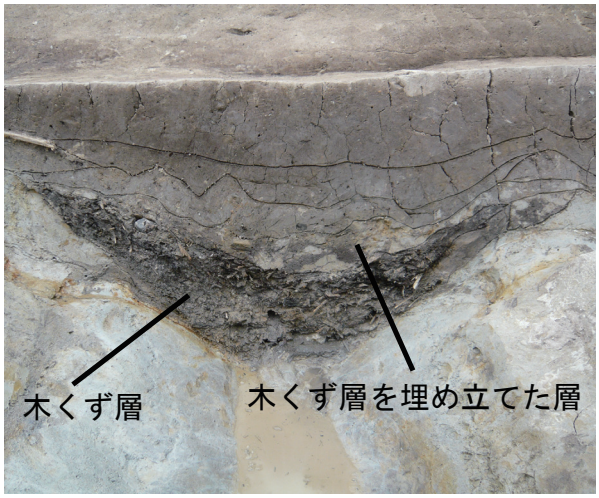
西大寺の歴史を秘めた溝

平城京跡（西大寺旧境内）奈良市西大寺新田町

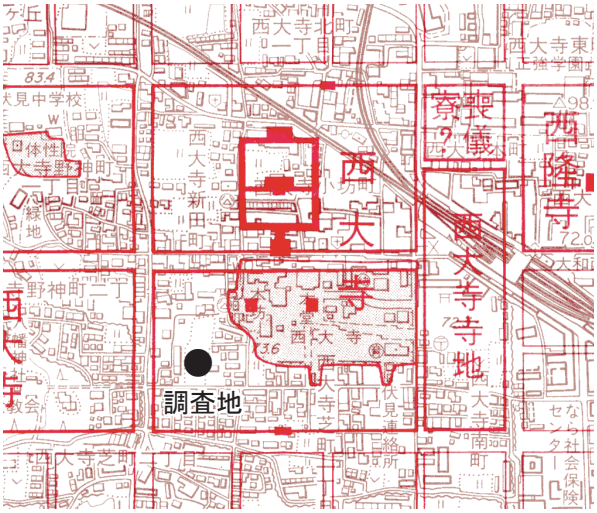
西大寺旧境内第25次調査地は、西大寺旧境内の南西部に位置し、『西大寺資財流記帳』から復原される十一面堂院と西南角院の間に推定される場所です。平成21年４月～７月に行われた調査で、寺内を区画していたと見られる奈良時代の東西方向の溝が見つかりました（溝01）。幅約７m、長さ30m以上の溝で、中心部が約2.5～3.7mの幅で一段深くなっています。深さは上段の浅い部分で0.5～0.8m、下段の深い部分でさらに0.9～1.5mあります。溝の埋土は、一番底に薄く部分的に灰色粗砂、その上に厚さ0.1～0.4mの木くず層、その上に木くず層と青灰色砂質粘土がブロック状に混ざって堆積しており、溝の一段深い部分を一気に埋め立てている様子が伺えます。



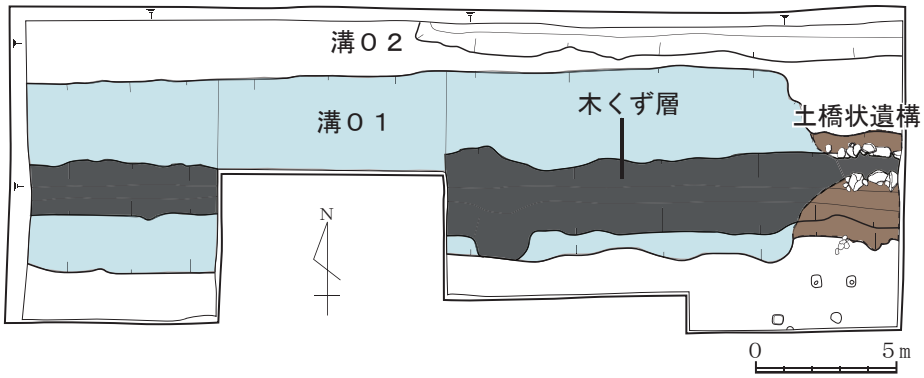
溝01の断面（東から）

木くず層と、その上の木くず層を埋め立てた土からは、８世紀後半の土器、瓦類、木製品、イスラム陶器、木簡などが出土しています。溝の最上層に堆積する土からは、８世紀末から10世紀初の遺物が出土しており、溝がその時期以降に埋没したことが分かります。

そのほかに発掘区の北端で幅0.7m以上、深さ0.5m、長さ17m以上の東西方向の溝を１条（溝02）、発掘区の東端で石組みの溝と土橋状の遺構を検出しました。土橋状遺構は、溝01の一段深い部分を埋め立てた後に石組みの溝を作り、その上に板などをかけて渡ったと考えられます。石組みの溝は暗渠だったと思われます。溝02・土橋状遺構からの出土遺物は非常に少量です。



発掘調査地点



発掘区の平面図（１／250）

木くず層から出土した遺物には、イスラム陶器、木簡の他に奈良時代後半の土師器、須恵器、黒色土器A類、硯、墨書土器、軒丸瓦、軒平瓦、丸・平瓦、三彩の垂木先瓦、施釉瓦、金属製品では帯金具、銅製の鋲、木製品では様々な部材、櫛、箸、題箋軸、人形、檜皮、モモ、ウメ、クルミ、ナス・ウリ科の種などが出土しています。

墨書土器　人名・寺院に関するもの・役所の部署名を記したものなどがあります。「皇甫東朝」は天平八(736)年の遣唐使船の帰国の際に来日し、日本の朝廷に仕えた唐人の名前です。天平神護二(766)年に唐楽を奏した功績により従五位下の位が与えられました。神護景雲元(767)年には雅楽寮員外助、花苑司正の職についていることが『続日本紀』の記事によって分かります。８世紀の日唐間の交流を物語る上で貴重な資料です。

瓦類　軒丸瓦の中に、西大寺西塔創建時の所用瓦があります。三彩の垂木先瓦も東西両塔で使われていたと考えられているもので、木くず層出土遺物の年代を知る手がかりの一つです。

木くず層の遺物は実に様々です。特に木簡・墨書土器の内容に文字の練習や試し書きが多く見られ、木簡を訂正したケズリ屑、硯、土器を硯に転用したものが多数あることから、木くず層の遺物は、西大寺の文書の作成などを行う事務機関がまとめて捨てたものと考えられます。

墨書土器「皇甫東朝」
須恵器杯

墨書土器「長」
須恵器杯

イスラム陶器

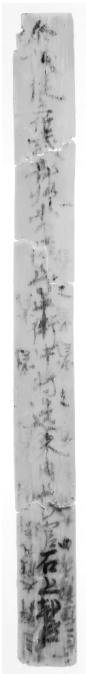
墨書土器
「西大寺／信師／六」
土師器甕

墨書土器　人の顔か
土師器皿

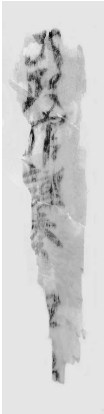
西塔創建時の所用軒丸瓦

三彩垂木先瓦

神護景雲二年三月五日『又様』



「　一　省　三　口　大　四　藤原　正三位　石上朝臣
参議従三位式部卿常陸守中衛中将造東内長官石上朝臣
「三野　大領　丸部　省　省　省二省



太政官謹奏　口口

出土した木簡の赤外線写真

（墨書土器・木簡赤外線写真は奈良文化財研究所中村一郎撮影）

発行　奈良市教育委員会　平成２２年７月